

脇殿の発見

正殿の南西側に南北方向の細長い大型掘立柱建物があることが分かりました。

これまでに見つかった施設は全体が左右対称となっているので、東側にも同じ規模の脇殿があったと推定できます。

神聖な広場空間

正殿、脇殿、門に囲まれた中は広場空間として利用されたと考えられます。

柵列内側の調査区からはこの時期の土器はほとんど見つかっておらず、土器が使われていたとしてもきれいに掃除して保たれていたことによると思われます。そのため、この空間は、神聖な儀式を執り行うためのものではないかと考えられます。

突如姿を消す建物

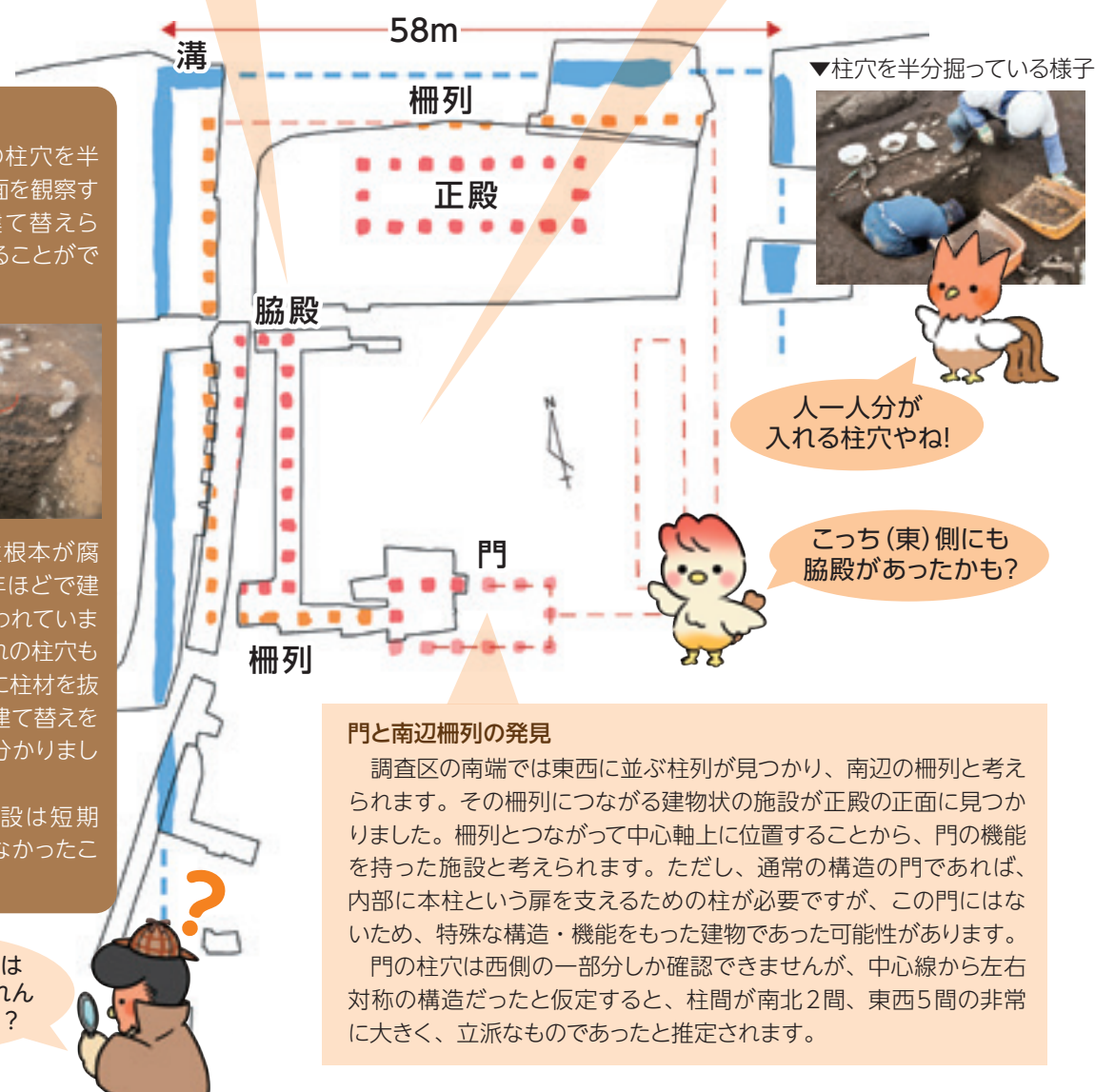
脇殿・門・柵列の柱穴を半分掘って土層の断面を観察すると、その柱が建て替えられたかどうかを知ることができます。



掘立柱建物は柱根本が腐るため、20～30年ほどで建て替えられると言われています。しかし、いずれの柱穴も建物を取り壊す際に柱材を抜き取って、その後建て替えをしていないことが分かりました。

つまり、この施設は短期間しか機能していなかったことになります。

なんでこの役所は短期間しか使われなかったがやろう？



門と南辺柵列の発見

調査区の南端では東西に並ぶ柱列が見つかり、南辺の柵列と考えられます。その柵列につながる建物状の施設が正殿の正面に見つかりました。柵列とつながって中心軸上に位置することから、門の機能を持った施設と考えられます。ただし、通常の構造の門であれば、内部に本柱という扉を支えるための柱が必要ですが、この門にはないため、特殊な構造・機能をもった建物であった可能性があります。

門の柱穴は西側の一部分しか確認できませんが、中心線から左右対称の構造だったと仮定すると、柱間が南北2間、東西5間の非常に大きく、立派なものであったと推定されます。

まとめ

これらの成果から、役所の正殿、脇殿、門、柵列、溝が50m余りの区画に整然と配置されていたことが分かりました。

若宮ノ東遺跡の役所跡は、土佐で最初に設置された役所と言えます。この役所が置かれた7世紀後半は、大化の改新を経て日本の国造りの基礎が出来てきた時代であり、土佐国を治めるにあたって、この役所がどのような役割を果たしたのか、注目されます。

若宮ノ東遺跡の北東500mの位置には、野中廃寺という古代寺院があり、若宮ノ東遺跡と密接な関係があったと推測されます。

おわりに

今回の調査では、正殿南側の建物配置が判明し、非常に大きな成果を得ることができました。しかし、なぜ一時期しかないのか、8世紀の役所はどうなったのかなど多くの謎が残ります。今後、周辺の調査が進むことで少しずつ謎が解明されることが期待されます。

なお、今回紹介した調査の現地説明会資料は市のホームページに掲載しています。

問い合わせ

生涯学習課文化財係

0802・90962



脇殿・門調査地

正殿

発掘調査で明らかに! 県内最古の役所跡「若宮ノ東遺跡」

(平成30年6月撮影)



若宮ノ東遺跡とは?
若宮ノ東遺跡は篠原の路面電車線路南側に広がっており、これまでに篠原土地区画整理などに伴う大規模な発掘調査などにより、弥生時代から江戸時代にわたる大規模な複合遺跡であることが分かっています。
特に7世紀後半の役所跡は、北側で中心建物である正殿と施設を囲む柵列、溝が見つかり、長岡郡ができる前の役所の中心施設と考えられています。この役所が置かれた7世紀後半は大化の改新を経て天皇を中心とした国造りを目指した時代で、このような役所は地方支配のために各地方に置かれていましたが、実際に見つかった例は全国的にも希少です。

古代の役所跡

若宮ノ東遺跡の役所跡の正殿は、古代の建物としては県内でも最大級の規模です。柱と柱の間隔が約3mもあり、当時の一般集落では考えられないほど大規模な建物です。柵列の柱間も正殿と同じ規格で建てられており、柱筋がきれいに揃っているため、高い測量技術で建築されていることもうかがえます。この時期に50mを超える区画でこれほどきちんと配置した施設は全国でもあまり例がありません。

今回の調査は、正殿南側に当たる場所で遺跡の内容を確認するための発掘調査を実施し、役所の中心域の様子が明らかとなりましたので、その成果をご紹介します。



▲今回の脇殿・門調査地
(令和6年4月撮影)